

著者・まえがき

皆さん、こんにちは。樋口雅也です。現在ボストンのマサチューセッツ総合病院で医師として働いています。高齢者のための外来や病棟での診療、そして緩和ケアを専門にしています。

本書は高齢者診療のど真ん中を突き抜ける、これまでになかった医療本です。

高齢者医療は複雑です。さまざまな要因が相関し、高齢患者の容体やその周辺状況は一見カオスのようにみえます。扱う情報が多く、複雑に絡み合っています。「慢性疾患は多いし」「認知症はあるし」「薬のリストはとてつもなく長く」「介護は必要で」「家族は近くにいない」。そんな高齢者医療に圧倒され、

ふと気づくと、「思考停止」に陥ってしまいます。

そして考えることをやめてしまうと、医師がとれる行動というのは「何もしない」か「すべてやる」などと、極端になりがちです。

しかし、本当にそれでよいのでしょうか。「何もしない」と「すべてやる」のあいだには、何か高齢者に大切なことがあるのではないのでしょうか。

じゃあ、考え続けるためのヒントをください（研修医の声）

ええ、まさしくそこを狙ったのがこの本なのです。超高齢社会では、高齢者医療はすべての医療者にとって「自分ごと」です（避けては通れません）。ですから、この一見カオスのような高齢者医療をできるだけシンプルに捉えることができるコツやホンネを本書に満載しました。

カオスをシンプルにだなんて、無茶ぶりです

もちろん、複雑なことは複雑です。ただ、「考えることをやめないこと」、このことが何よりも重要であり、皆さんに「とりあえず高齢者医療をシンプルに捉え、はじめの一步を踏み出してほしい」と思い、メッセージ化したのです。

そして、考え続けることが、高齢者医療全体を押し上げます。医療者1人ひとりが、少しずつ高齢者医療をよくしようとストレッチすれば、高齢者が受ける医療は「いつでも」「どこでも」「格段に」よくなるのです。本書の狙いはまさにそこにあります。

これまで「気づいていなかった」、または「整理されていなかった」高齢者診療のコツやホンネは、すでに皆さんの目の前で起き、頭の中に芽生えていると思います。そのためには「思考停止」とならず「考え続けること」、本書がそのことに気づききっかけとなり、高齢者診療を俯瞰するスキルを身につける一助となれば、と思っています。

それが「ど真ん中の高齢者医療」なんですネ。

はい。その気づきは、あなたの中にあります。

最後に、お声をおかけいただいた、あめいろぐシリーズ監修の反田篤志先生、高齢者・緩和医療で北米随一といわれるマウントサイナイ病院で研修を受けられた植村健司先生、そして程田靖弘様をはじめとする丸善出版編集部の方々のご尽力に感謝申し上げます。

2020年7月吉日

初夏のMGHボストンオフィスにて

共著 樋口 雅也